



なぜ大阪へ？

これは、日本第三の大都市である大阪に移り住んで以来、非常によく聞かれる質問です。

エクスペリエンスデザイン分野の若い起業家であれば、東京で活動するのが当然であり、唯一の選択肢だと思うことでしょう。こうした考えは「ノーブレイナー（考えるまでもないこと）」と呼ばれ、「そんなこと敢えて聞く必要がある？」とでも言わんばかりに頭を軽くトントンと叩いたり、肩をすくめたりするような話です。

日本人や外国人駐在員コミュニティの反応は概ねそんなところでした。ところが、東京の目と鼻の先で、急成長する新興企業の様子や目の眩むようなエネルギーを目の当たりにした私は、これは何か大きなことが起きようとしているに違いないと思ったのです。

ちなみに、一般的に大阪が、そこに関係したことででもない限り話題には上らないと感じていました。そこで、私自身がこれまで観察したことや調べてきたこと、直感的な印象を、この記事がお役に立ちそうな皆さまと共有したいと思います。この記事は、ありがちで同じような質問や回答を扱いますが、誰も語ってこなかった本当の大阪について触れていきます。

今こそ大阪が輝くときです。

少しだけ話は遡り、まずは私が現在の心境に至った経緯をお話しましょう。

■今こそ心機一転

2020年10月、アメリカの多くの地域ではさまざまな形でロックダウンが実施されていました。私たち家族はラスベガスに住んでいて、育ち盛りの娘がいましたが、当時の私はアメリカでの将来を考えなければならぬ時期に差し掛かっていました。

過去4年間、NFATAビザを持っていた私は、ラスベガスにある広告代理店で働いていました。トランプ政権は再選を目指して活動しており、巷にはとても陰悪で、暗い雰囲気漂い始めていて、幼い娘をこのような環境で育てたくはありませんでした。そこで、私たちは決断し、荷物をまとめてアメリカを離れることにしたのです。

私は常々、日本に住みたい、日本で仕事をしたいと思っていたので、まさにうってつけのタイミングだと思いました。この上なく先行きが不透明な情勢ではありましたが、リスクを取る価値があると妻と私は考えました。

私には十分な貯蓄があり、キャリアも好調で、移住しても安定するまで我慢してくれる家族がいるという、ちょっとしたセーフティネットもありました。カナダに戻ることに魅力は感じませんでしたし、生活費も高くて手に負えないレベルになりつつありました。一方で日本は、私たち子どもを持つ家族にとって格段に暮らしやすく、アジア経済の見通しも明るいように思えました。「今」しかないと思ったのです。



妻が日本人であることも手伝って、コロナ禍ではありましたが、移住できることになりました。コロナ禍ではない絶好のタイミングであっても、移住にはリスクが付きものでしたが、忍耐と粘り強さが実を結びました。相応の苦勞がなかったわけではありません。

1か月後、私たち3人は、10個のスーツケースを抱えて関西国際空港に降り立ちました。2週間の待機期間を経て、新たな冒険に乗り出しました。

■東京は唯一にして無二

これは半分正しくて、半分間違っています。

時間だけはあったので、私は東京に居を移し、ビジネスを立ち上げ、人脈を作って顧客との仕事に繋げるまでの長いプロセスをシミュレーションしていました。

東京は常に、日本のあらゆるものが集まる中心地でした。ビジネスからデザイン、エンターテインメント、文化に至るまで、日本の中の独立国といった感じで、人々を退屈させることなく、常に変化を続けています。それなのに、あえて東京ではない他の場所へ行く必要などあるでしょうか？

東京のアピール力は絶大で、これまでもずっと「日本と言えば東京」というのが海外から見たイメージでした。

今にしてみれば、「東京＝日本」ではありません。しかし、海外の人に「日本について」尋ねても、大阪や岐阜、和歌山の話が出てこないのは仕方のないことでしょう。



私は東京に憧れて育ちました。過去 20 年間に何度も東京を訪れたことが、私のデザイン分野でのキャリアに大きな影響を与えたのは間違いありません。そして今、私はこの活気ある大都会の一員になるチャンスを手にしたのです。

ところが、コロナは私に別の計画を用意していたようです。

■チャンスのブルーオーシャン

東京では企業の多くがリモートワークに移行していますが、私の場合、実際に会って対面でミーティングをしたり、書類に署名したり、アパートを探したりと、現地でなければできない仕事ばかりでした。しかし、東京での新型コロナウイルスの感染者が増えたことで自由に行き来することができなくなり、東京を再訪するのは、おそらく7か月ほど先の話になりそうでした。

政府が「最善を尽くした」にもかかわらず、一向にコロナ収束の兆しは見えませんでした。このまま何もしないわけにはいきませんでした。そこで私は、大阪に拠点を置き、いずれ機を見て東京に移転しようと考えました。

大阪での新型コロナウイルスの感染者数は一時、比較的少なく、移住する上で好都合だったので、

アメリカを出発する前に、[大阪外国企業誘致センター\(O-BIC\)](#)、[在日カナダ商工会議所](#)、[JETRO \(日本貿易振興機構\)](#)、[大阪イノベーションハブ\(OIH\)](#)、[ナレッジキャピタル](#)(その他多数)といった、さまざまな機関と連絡を取り、大阪の市場について徹底的に調べ、ビジネスの立ち上げに必要な情報を集めました。大阪について有益だった情報をいくつかご紹介します。

1. 日本第三の大都市。
2. [世界で最も住みやすい都市、第2位。](#)
3. [東京の家賃は大阪に比べて約45%高い。](#)
4. 日本の中心に位置し、国内の他の都市にアクセスしやすい。
5. 大阪は西日本の中心的な拠点であり、最先端の交通網が整備されているため、スムーズな行き来が可能。東京へは新幹線で2時間半、飛行機で1時間、京都へは電車なら1時間で移動可能。
6. 大阪には2つの国際空港があり、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、南北アメリカへのアクセスが非常に便利。ロサンゼルスへは約10時間、シンガポールへは7時間、香港へは3時間弱、ソウルへは2時間以内で移動可能。
7. 関西は革新的なテクノロジー企業の本拠地であり続けている(パナソニック、カプコン、シャープ、任天堂、京セラ、その他多数)。
8. [2025年日本国際博覧会](#)の開催地。
9. 海外スタートアップの受け入れを歓迎。

緊急事態宣言下でも大阪では通常どおりのビジネスが行われており、対面でのミーティングも日常的に行われていました。業界団体やコワーキングスペース企業、ビジネス組織とミーティングを数多く重ねる中で、シンガポール、オーストラリア、イギリス、アメリカ、カナダから来た若者たちが、同じく大阪で経験を積もうとしている姿を目の当たりにしました。多様なコミュニティが育ちつつあることは、大阪が未来への投資に真剣に取り組んでいることを示す証でした。

数々の賑やかなコワーキングスペースは、事業が新たに立ち上がる時に見られる活気に満ちていました。人々は本当に好奇心に溢れ、アドバイスをくれたり、自身の時間を割いてくれたり、人を紹介してくれたり、「新参者」が成功するために必要なあらゆるチャンスを与えてくれました。

お互いが目標に向けて前進し、成功する姿を目にすると、そこにはこうした共通の誇りがあるのです。

話をする相手が相手なら、「誰もまだ行ったことがないから」という理由で大阪を選んだ私の決断に驚くでしょうし、「東京がすべての中心だから」、東京を差し置いて大阪を選んだ私を傲慢だと思うことでしょう。



ある大阪のビジネスマンは私に「大阪は、自ら訪れる人にとって、チャンスに溢れるブルーオーシャンだ。そのことに世界もすぐ気がつくだろう」と語ってくれました。そして、大阪に滞在すればするほど、そのことがよく分かるようになりました。

大阪では、多くの企業がアクセラレータープログラムでAI、IoT、フィンテック分野の意欲的な起業家を支援しています。このことは、大阪での起業の動きが一過性のトレンドではなく、今後の国内外のビジネスにおいて、より重要な役割を果たしていくことを証明しています。大阪は日本の中心に位置するため、移動の拠点として最適であり、東京での会議に出席して夕食前に帰宅することも可能です。大阪の空港はアジアへの玄関口であり、多くの国際線が世界各地を結んでいるため、ビジネスチャンスをつかむためのハブとして完璧です。

今の大阪は白紙の状態であり、市民が一丸となって、新しい技術、デザイン、そして優れたユーモア感覚で、大阪の未来を描いている最中です。コロナ禍は、実現しなかったかもしれない、あるいはその良さが評価されるのはかなり先であったであろう機会を呼び覚ました。現在は、実験と発見が続くエキサイティングな時期にあると言えます。

■ 形勢逆転の時

少し前まで、大阪の評判は素晴らしいとは言えず、安定的な都市とは言えませんでした。しかし、現在では世界中の若い家族が新たな出発を求めて集まってきています。大阪は、物価も安く、安全で人情味に溢れ、東京に劣らず多くのチャンスを与えてくれます。

2025 年の万博開催は、国際社会における大阪の将来的な重要性を示す素晴らしい証明となり、日本第三の都市を照らす新たな光となります。

これからの課題は、大阪の可能性を発信していくことです。最初に克服すべきは、大阪の PR に問題があると認識することにあります。

東京以外の地域で何が起きているか知らない人がいたとしても、それほど驚くに値しません。東京の強みはその規模であり、人々を引き付けるその重力の強さにあります。しかし、デジタルツールがかつてないほど普及している今、大阪は高額な広告や実地のキャンペーンに頼る必要はありません。その代わりに、大阪は誠実で正真正銘のストーリーを発信することで、成長を続けるコミュニティから未来の支持者を増やすことができるのです。

妻が日本人であることも手伝って、コロナ禍ではありましたが、移住できることになりました。コロナ禍ではない絶好のタイミングであっても、移住にはリスクがつきものでしたが、忍耐と粘り強さが実を結びました。相応の苦勞がなかったわけではありません。

1 か月後、私たち 3 人は、10 個のスーツケースを抱えて関西国際空港に降り立ちました。2 週間の待機期間を経て、新たな冒険に乗り出しました。

街を見渡せば見渡すほど、必要なものはすべてここにあると実感します。私は関西人の魅力とカリスマ性、特に「自分たちには自分たちなりのやり方がある！」という気風が大好きです。この心意気溢れる街には多くの発見があり、いつでも楽しませてくれます。以上が、私が大阪に来た理由です。



この結びの言葉は、これまでの私の大阪での生活を振り返りながら、心を込めて書きました。読者の皆さんが何かを考えるきっかけとなれば幸いです。

“大阪は、ビジネスにオープンな街で、活気と共有すべきアイデアに溢れています。いつでも、テーブルにお席をご用意し、よく冷えたビールと心のこもったおもてなしで、皆さんをお迎えします。大阪では、皆さんはお客様でなく、私たちの仲間なのです。”